

〈提 題〉

哲学入門と翻訳

——ボエティウスの『エイサゴゲー』訳注をめぐって——

西村 洋平

はじめに

ボエティウスはアリストテレスのオルガノン関連の著作を翻訳し、初期中世哲学の論理学に大きな影響を与えた。しかし、ボエティウスはギリシア論理学をただ伝達した「ダクト」(conduit)や「パイプ」(pipe)にすぎなかったとする見解がある。それによれば、彼の翻訳はリテラルであり独自の解釈があるわけではない。このよくできたパイプを通して何が伝わり、それを中世哲学がどう受容したのかが研究されなければならない、といった見解である。これに対して Marenbon は、ボエティウスにはオリジナリティがあり、中世哲学もそれを受動的に受容したのではないとし、「ダクト・パイプ」見解を否定している¹⁾。

本提題では、ポルピュリオス『エイサゴゲー』(以下、*Is.*とする)のボエティウスによる訳注を取り上げて、「翻訳としての中世哲学」というテーマに寄与したい。具体的には *Is.* 冒頭の箇所を取り上げ、その翻訳を検討する(以下の 1.)。次に類・種の存在をめぐる注釈(2.1.)と種差をめぐる注釈(2.2.)を取り上げる。マリウス・ウィクトリヌスの翻訳を用いた最初の注解(以下、*IIS*)では新プラトン主義の要素は見られるが、自らの翻訳による二つ目の注解(以下、*2IS*)ではそれが見られない。しかしそのことは、ボエティウスがアリストテレス主義的であろうとしたことを意味しない。ポルピュリオスがプラトン哲学を視野にいれて *Is.* を書いたように、彼はより高次の段階の哲学あるいは神学を視野にいれて訳注を書い

1) J. Marenbon, "Boethius's Unparadigmatic Originality and Its Implications for Medieval Philosophy", T. Böhm, T. Jürgasch und A. Kirchner (ed.), *Boethius as a Paradigm of Late Ancient Thought*, De Gruyter, 2014, pp. 231–232.

ている。しかし 2IS ではそうした意図はあまり見えてこない。この点にボエティウスというパイプの特色があると言える。

1 ボエティウスの翻訳

まずは中世普遍論争の出発点となる *Is.* 冒頭から見てみることにしよう。

[A] たとえば類と種に関して, [1] それらが存在するのか, それともただの観念としてのみあるのか (εἶτε ... εἶτε), [2] また存在するとしても, 物体であるのか, 非物体的なものであるのか (εἶτε ... ἢ), [3] また [非物体的ならば] 離在可能なものなのか, それとも感覚対象のうちに, これらをめぐって存在するのか (πότερον ... ἢ), という問題については, 私は論じることを回避するでしょう。このような仕事はきわめて深遠で, もっと大きな探究を必要とするからです。[B] 他方で, それら [類と種] および課された [五つの] ものについて, 古人たち, そのなかでもとりわけペリパトス派の人たちが, [形而上学的にではなく] むしろ論理的に (λογικώτερον), どう理解したかを, 今あなたに示すことを私は試みましょう。(Porphyrius, *Is.*, 1.1-16²⁾)

ここでは, ボルピュリオス自身が扱わないと述べる三つの問いがそれぞれ選言によって提示される前半部 [A] と, どのような仕方で論じるのかを示した後半部 [B] に分けることにしよう。まずはこの箇所のボエティウス訳を比較して見てみることにする。最初に書かれた *IIS* はウィクトリヌス訳を使用するが, その注釈においてすでにウィクトリヌスの訳の問題を指摘している³⁾。その後ボエティウスは, 自らの訳とともに新たな注解を書いているが, 訳を直しただけでなく注解で扱う内容も変えている⁴⁾。順に

2) テキストは Busse 版 (A. Busse (ed.), *Porphyrii Isagoge, Commentaria in Aristotelem Graeca* IV 1, 1887), 邦訳は水地宗明訳 (田中美知太郎編『世界の名著 続 2』所収, ボルピュリオス「イサゴーゲー」, 中央公論社, 1976 年) を一部改変して用いる。以下, 同様。

3) P. Hadot, *Marius Victorinus: Recherches sur sa vie et ses œuvres*, *Études Augustiniennes*, 1971, p. 184, n. 20.

4) 説明のために出される例などがオリジナルだった *IIS* から, *2IS* ではアリストテレスの借用だけになっていることから, Asztalos はボエティウスが疲れてきたとも指摘している。M. Asztalos, "Boethius as a Transmitter of Greek Logic to the Latin West: The *Categories*", *Harvard Studies in Classical Philology* 95, 1993, p. 375. なお *2IS* の前に『カテゴリー論注解』が書かれたと推定する彼女の独自の見解については, 彼女が長らく予定している同書の校訂

見てみよう。

[A] そこで私は言った. 彼が述べているのは次のようなことです, 「類や種そのものは, [1] いったい真に存立するのか, それとも単に思惟ないしは精神によってのみ把持されるのか (utrum vere subsistant an intellectu solo et mente teneantur), [2] それらは物的なものであるのか非物的なものであるのか (an corporalia ista sint an incorporalia), そして, [3] いったい分離したものなのか, それとも感覚的なものそのものに結合したものなのか (utrum separata an ipsis sensibilibus iuncta) ということには, 自分はまったく触れないでおく」と述べているのがそうです。これらの問題については, 議論がなおいっそう深淵になるがゆえに, 彼自らは述べないでおくとあらかじめ言及したのですが, しかしわれわれとしては, 節度の手綱を適用しつつ, 適度な仕方でおのおの問題に触れることにしましょう。……というのも, 「そうしたことは」と彼自身も言っているように, 「より多大な研究に属するものなのである」.[B] そして, ペリパトス学派の人々から——つまりアリストテレス主義者たちから——受け容れられた学識に自分は従うということを彼は告白したのだからです (quam doctrinam a Peripateticis acceptam, id est ab Aristotelicis, se sequi confessus est). (Boethius, *IIS*, 24.4–10; 31.7–9⁵⁾)

[A] Mox, inquit, de generibus ac speciebus [1] illud quidem, sive subsistunt sive in solis nudis purisque intellectibus posita sunt [2] sive subsistentia corporalia sunt an incorporalia [3] et utrum separata an in sensibilibus posita et circa ea constantia, dicere recusabo. altissimum enim est huiusmodi negotium et maioris egens inquisitionis. ... [B] Illud vero quemadmodum de his ac de propositis probabiliter antiqui tractaverint et horum maxime Peripatetici, tibi nunc temptabo monstrare. (Boethius, *2IS*,

本とともに検討したい。

5) テキストは Brandt 版 (S. Brandt (ed.), *Anicii Manlii Severini Boethii in Isagogen Porphyrii commenta*, Tempsky / Freitag, 1906) を使用した。邦訳は石井雅之訳 (上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成 5 後期ラテン教父』所収, ボエティウス「ポルフェリウス・イサゴゲー註解」, 平凡社, 1993 年) を用いたが, 一部修正し, 訳語も統一のため改変している。以下, 同様。

159.3-9; 167.21-23⁶⁾)

前半部の三つの問いの選言の訳を比べれば、ポエティウスのリテラルな訳へのこだわりがすぐに見て取れるだろう。[1] εἶτε ... εἶτε, [2] εἶτε ... ἢ, [3] πότερον ... ἢ は、*2IS* では [1] sive ... sive, [2] sive ... an, [3] utrum ... an とされ、選言詞の対応が一貫しているが、ウィクトリヌス訳は [1] utrum ... an, [2] an ... an, [3] utrum ... an となっている。

だがポエティウスは、たんにリテラルな訳にこだわったわけではなく、その意味も忠実に（あるいは自らの解釈に沿った仕方でも）訳そうとしている。たとえば [B] 下線部の λογικώτερον は、現代では「(形而上学的にでなく)むしろ論理的に」と訳されている⁷⁾。これに対してポエティウスは、λογικῶς (rationaliter) というよりもむしろ ἐνδόξως (verisimiliter) が意味されていると解釈し、比較級にすることなく probabiliter と訳している (*2IS*, 168.11-169.2)。導入は初心者考えを超えるべきではなく (non praeter opinionem ingredientium), より専門的な rationaliter よりも probabiliter という意味で理解されている。

アリストテレスが学問の出発点にしたのが、人々や過去の哲学者の見解 (ἐνδοξα) であった。ここではボルピュリオスがペリパトス派や古人の見解を初心者のための出発点にしている、とポエティウスは解釈しているのだろう。あたかもボルピュリオスがペリパトス派の学識に従っている (doctrinam ... se sequi) とする *IIS* の読みとは大きく異なると言える。

2. ポエティウスの注釈

2.1. 類種存在をめぐる

訳については以上にし、彼の解釈に少し踏み込んでみよう。普遍論争の火種となる上掲前半部 [A] の問いについてポエティウスはどのように解釈したのか⁸⁾。類種が存在するかただの観念かという [A1] の問題に

6) テキスト等は *IIS* と同様。*2IS* は拙訳を用いるが、ここはリテラルな訳なので省略する。

7) 英訳・注を行った Barnes は from logical point of view と訳している。J. Barnes (tr.), *Porphyry. Introduction*, Oxford Clarendon Press, 2003, p. 3.

8) Barnes はここでの問いは普遍論争にそもそも関連せず、ホコリを撒き散らしているだけ(無駄な問い)ではないかとすら述べる (Barnes, *op. cit.*, p. 49)。他方で Chiaradonna はボルピュリオスの存在論に基づいた意味のある問いだとしている。R. Chiaradonna, "What Is Porphyry's Isagoge?", *Documenti e studi sulla tradizione filosofica medievale* 19, 2008, pp. 20-22.

対して、*IIS*ではいかに人間が感覚を通して類や種を思惟するのかという認識論的な議論から出発する(24.14-25.3)。存在か観念かは、「物的な個物から真正かつ純全な仕方です引き出された人間の種をわれわれは思惟するのか」どうかによる(*IIS*, 25.11-15)。*2IS*も同様に認識論的な枠組みで論じられ、「数的には異なる個物もつ実体的な類似性によって集められた思考」(*cogitatio collecta ex individuorum dissimilium numero substantiali similitudine*)としての種は存在すると論じる(*2IS*, 166.8-21)。

類種が物体か非物体かという[A2]の問題に対して、*IIS*は次のような分析的区別を導入する。たとえば実体という類は、「〈実体〉である限りにおいて考察されているのではなく、当のそれの下に種を有する限りにおいて」(*non considerari ... in eo quod substantia est, sed in eo quod sub se species habet*)考察されるのだという(*IIS*, 28.14-29.3)。そのような類というものは非物体だという。続く非物体のタイプについての議論[A3]では、(a)まったく物体を許容しないもの(精神や神)、(b)物体なしには存在することができないもの(「境界に接する第一の非物体」が例として出されるが、おそらく内在形相)、(c)物体において存在しているが、また物体なしにそれ自体として存在することができるもの(魂)という3種類が提示され、類種については(c)だとされる(*IIS*, 29.22-30.8)。非物体を3種に区別するのは新プラトン主義的だと言える(a.物体から完全に切り離された知性・イデア, b.物体のうちにある内在形相, c.物体をめぐって生じる魂)。

しかし、*2IS*は[A2]に対して*IIS*のような分析的区別を用いず、類種が非物体であることを簡単に認める。問題はその非物体の身分であり、思考のみによって存在するとする説に対する批判が展開される(*2IS*, 161.14-164.2⁹⁾)。そして[A3]については、ポルピュリオスに従い離存可能か否かで分類する2種類の非物体にだけ言及する。その一つが(a*)物体から離存してもみずからの非物体性において存続するもの(神, 精神, 魂)であり、もう一方(b*)が、物体なしには存在できないもの(直線, 表面, 数, 個別性質)である。

*2IS*では(c)を(a*)に集約して2区分にしているが、おそらく、より高次の学で魂や精神の区別が行われるべきだと考えたからであろう。さらに*2IS*でボエティウスは、類種が感覚される物体のうちに存立する限り

9) Marenbonはこの議論を「普遍的なものに対する形而上学的議論」(a metaphysical argument against universals)と呼ぶ。J. Marenbon, *Boethius*. Oxford University Press, 2003, pp. 26-28.

では (b*) だが、思惟されるものとしては (a*)、すなわち「それら自身で存立するものとして、そして他のものの中に自己の存在をもつのではないものとして」(ut per semet ipsa subsistentia ac non in aliis esse suum habentia) ありもすると主張する。まさにこの類や種の自体的存立をめぐって、プラトン主義とアリストテレス主義は袂を分かつ。それを意識してボエティウスは次のように述べている。

だがプラトンは、類と種その他のものは、ただ普遍的なものとして思惟されるのではなく、真に存在し物体なしに存立すると考えている一方で、アリストテレスは非物体的で普遍的なものとして思惟されるが、感覚されるものの中に存立すると考えている。私はこれらの見解を判定することは適切だとは思わない。というのも、それはより高次の哲学に属することだからである。だがわれわれは、アリストテレスの見解をかなり熱心に追ってきたのだけれども、それは、われわれがとりわけアリストテレスの見解を承認していたからではなく (studiosius Aristotelis sententiam executi sumus, non quod eam maxime probaremus)、この書〔『エイサゴーゲー』〕が『カテゴリー論』に向けて書かれているからであり、アリストテレスはその書の著者だからである。(Boethius, *2IS*, 167.12–20)

類を (a*) でもあり (b*) でもあると多層的に理解するのは、プラトンとアリストテレスの調和を目指したポルピュリオス解釈に従ったものであろう。少なくとも、類や種に (a*) の身分を認めることがアリストテレスから逸脱したものだと、ボエティウスは自覚している。ただし、「アリストテレスの見解を熱心に追っている」というのは皮肉ではないと思われる。類種の存在をめぐる議論を普遍の抽出という認識論的な文脈におくことは、(彼によるそれらの訳注は存在しないが)『分析論後書』や認識論などを視野にいた注釈であり、「自体的」(per semet) や「他のものうちに」(in aliis) という非物体をめぐる表現は『カテゴリー論』を踏まえたものだと考えられるからである。

2.2. 類は種を生み出す種差を持つことについて

別の箇所も検討してみよう。ポルピュリオスは以下で、種差について語る。

そこで、まさにこれら〔種差〕を定義して彼ら〔哲学者たち〕はこう言うのである。種差とは、種が類からはみ出す部分（περισσεύει）であると。例えば、人間は動物に比べて「理性的」と「可死的」とを余分に有している。なぜなら動物はこのどちらでもないし——しかしそれでは種はどこから種差を得るのだろうか。——また〔理性的と非理性的、可死的と不死的などの〕排反する差異をすべて有しているのでもない。同一物が同時に排反するものを持つことはありえないからである。むしろ彼らが是認するところでは、動物〔という類〕は、自己の下のすべての種差を可能態においては有しているが、現実態においてはどれ一つ有しないのである。そしてこのように考えるならば、あらゆるものから何かが生じるわけでもなく、また排反するものが同時に同一のもののもとに存在することにもならないであろう。（Porphyrius, *Is.*, 10.21–11.6）

「動物」という類に対して、「人間」という種は理性的な動物であり、「動物」をはみ出した（περισσεύει）種差すなわち「理性的な」を余分に持つ。しかしこの種差はどこからきたのか。原因は結果をすぐれた仕方でするという新プラトン主義特有の考え方に基づけば、類のうちにはすべての種差（とそれによって構成される種）があることになる¹⁰⁾。別の箇所では、種差は種を「満たす」（*Is.*, 9.20, συμπληροῦν; *2IS*, 251.10, complement）や「完成する」（*Is.*, 10.17, ἀποτέλεσαν; *IIS*, 91.21; *2IS*, 258.19, perfecerunt）と語られる。これをただの比喩ではなく実際の因果関係と捉えるならば、そして類が自体的に存立するものだとすれば、類というものが種に先行して存在し、類のうちにある種差とともに種が生み出されることになる¹¹⁾。ポエティウスは *IIS* でこのような新プラトン主義の因果関係を示す発出論の枠組みで注釈する。

10) 類種についての新プラトン主義特有の論理については Lloyd の議論が参考になる。A. C. Lloyd, *The Anatomy of Neoplatonism*, Oxford Clarendon Press, 1990, pp. 76 ff.

11) Barnes (*op. cit.*, p. 189) によれば、このような仕方では類種関係を考えることは「間違っているし、不要」(both mistaken and unnecessary) であり、そうした新プラトン主義的発出論を想定せずとも中立的で論理的な仕方ではボルビュリオスを読むことができるとしている。

ところで、これらの種を形成する差異を、かの差異の定義について論じた人々は、それによって種が類から溢れ出る (abundant) ようなものであると説明しています。……類はまさしくギリシア語を話す人々がエネルゲイアと呼んでいるところの、ほかならぬ現実活動態においてはそれらの差異をもっていないが、しかし他方可能態において類は、自らの種へ注ぎ入れる (fundit) これらの差異自身を欠いていることがないと言われるべきです。……そのことゆえに、種は現実活動態において差異を包摂しており、類は他方可能態においてであるので、種は類から正当にも溢れ出ると言われるのです。類が可能とすること、すなわち類を作り出すことを、種は単に可能とするのみでなく、さらに実現しているからです。つまり、それらはほかならぬ種において位置づけられ形成されてあるのです。(Boethius, *IIS*, 92.5-7; 93.5-22)

「はみ出す」(περισσεύει) は「溢れ出る」(abundant) と訳され、引用後半では類が種差を「注ぎ入れる」(fundit) とも言われる。具体的には動物という類が可能的に「理性的」と「非理性的」という種差を持ち、自らそれらを流れ出させることが可能 (*IIS*, 93.16-17, potest ... ex se ... profundere) だという。ここでの可能態 (potestate) は、何かを欠いていて、現実態にあるものによって現実化される状態ではなく、それ自身の力によって生み出すことができるという意味での能力に近いだろう (第一可能態というより第二可能態)。もちろん、通常の意味での類はそのような種差を生み出す原因ではない。

2IS はこうした「流出」表現を用いない。しかし可能態の意味は、立っているソクラテスが座することも座らないことも可能であるという例で説明されており (*2IS*, 264.7-10), *IIS* の理解と基本的には変わらない。そして「類そのものは、それ自体として考察されるならば、種差を欠いているが、種との関係におかれるならば、それぞれに分かれた種をとおして、あるいはその諸部分において反対のものを保持する」(*2IS*, 264.21-265.2) とされる。類が種差を持つことにこだわる背景には、上掲のボルピュリオスが示唆する、「あらぬものから何も生じない」や「同一のものが排反するものを持たない」といったアポリアがある。とはいえそのようなアポリアに直面しなければならぬのは、類がそれ自体で存在し、種や種差を生み出すという新プラトン主義の論理を受け入れているからに他ならない。

ま と め

『エイサゴゲー』はアリストテレス『カテゴリー論』への導入ではない¹²⁾。哲学的論証、それをを用いるアリストテレス哲学、さらにアリストテレスが扱う範囲を超えたアイデアや神について論じるプラトン哲学へと向かうための第一歩なのである。アリストテレスとプラトンが調和すると解釈するボルピュリオスによる哲学入門は、深遠な議論には踏み込まないとしつつも、特定のバイアスを持ったものだと言える。

ポエティウスの翻訳・注釈プロジェクトは彼の早すぎる死によって実現されなかったが、おそらくボルピュリオスが目指したアリストテレス哲学とプラトン哲学の調和にとどまるものではなかったはずである。というのも、多くの論者が指摘するように、オルガノン注解は神学的議論にも応用されているからである¹³⁾。本提題はそうした神学的展開に踏み込むことはできなかったが、ポエティウスにはプラトン主義的なバイアスがあるということを確認してきた。しかし、彼はプラトン主義の議論を知りながら、入門書という自覚のもとそれらを控え、アリストテレスにも従うと述べてもいる。2INで強まるそうした注釈方針は、逆にポエティウスが持つバイアスを見えにくくしていると言える。アリストテレス認識論や存在論、そしてプラトン主義にあまり触れることのなかった中世初期にとっては、なおのことプラトン主義色は意識されなかったことだろう。ボルピュリオス『エイサゴゲー』の翻訳を忠実にいき、解釈もアリストテレスに従ったものであろうとするが、全体の方向性は異なるところ（プラトン主義、あるいは神学）を向いているという意味で、ポエティウスは特異なパイプだと言える。

その独自性は、おそらく同時代の別のパイプラインと比較することでより見えてくるだろう。Hugonnard-Roche の見解が正しければ、オルガノン関連著作を（その他ギリシア医学とともに）シリア語に訳したレシアイナのセルギオスは、アレクサンドリアでアンモニオスの講義に出ていた¹⁴⁾。

12) 定義や論証を学ぶためでもあると言われるため (*Is.*, 1.3-6), 「オルガノン」全体を視野に入れたものだろう。Cf. Barnes, *op. cit.*, p. XV.

13) Cf. A.-Ph. Segonds (tr.) et A. de Libera (intro.), *Porphyre. Isagoge*, J. Vrin, 1998, p. LXVII, n. 106; Marenbon, *op. cit.*, pp. 31-32.

14) H. Hugonnard-Roche, "Note sur Sergius de Reš'ainā, traducteur du grec en syriaque et commentateur d'Aristote", G. Endress and R. Kruk (ed.), *The Ancient Tradition in Christian and Islamic Hellenism*, CNWS, 1997, pp. 121-143.

おそらくポエティウスとセルギオスのつながりはないだろうが¹⁵⁾、広い哲学史的視点で見ると、同じ時代にアリストテレス哲学の、そして哲学全体の入門として位置づけられた『エイサゴゲー』や『カテゴリー論』が異なる言語に翻訳され、影響を与えることになったという事実は興味深い。そうした広い視点での考察については、今後の研究に俟つこととした。

15) ポエティウスがどこでギリシア哲学を学んだのか諸説あるが、近年は（よくわからないとする）慎重な態度がとられている。この問題については Zambon の詳しい考察が参考になった。M. Zambon, "Aristotelis Platonisque sententias in unam revocare concordiam. Il progetto filosofico boeziano e le sue fonti", *Medioevo* 28, 2003, pp. 17-49.